

東京 陵 水

平成15年度総会
を成功させよう
陵水会東京支部役員一同

目次

- 1 面 創立八十周年を祝して（岡田理事長）
- 2 面 平成十五年支部総会
- 3 面 大学院博士後期課程発足記念講演会
- 4 面 創立八十周年「陵水歌集とCD」
- 5～6 面 平成十四年総会トークショー
- 7～8 面 対談「こんにちは」
- 9～12 面 「砂漠の中の柔道場」
- 13 面 故川瀬元理事長を偲んで
- 14 面 「高良会」開催
- 15 面 ゴルフ談義・囲碁会便り
- 16 面 彦根コンフィデンス

陵水会東京支部会員の皆様には、平素陵水会の事業運営にご協力、ご支援をいただき誠にありがとうございます。本紙上を借りて厚くお礼申し上げます。

さて、既にご承知のとおり、母校・滋賀大学経済学部は、本年創立八十周年という記念すべき年を迎えました。

陵水会員の皆様とともに、先ず以て心からお祝い申し上げます。

この間母校は第二次世界大戦をはさんで、幾多の辛酸を舐めてまいりましたが、今では、経済・ファイナンス・企業経営・会計情報・情報管理・社会システム等の六学科を持ち、一学年六百名の学生を擁する、国立大学経済学部としては、最大規模の学部で発展してきました。また、昭和四十八年には大学院も設置され、現在、経済、経営、グローバル・ファイナンスの三専攻の修士課程が設置されていますが、さらに本年四月からは待望

の大学院博士後期課程「経済経営リスク専攻」が設置されました。本専攻は社会科学系としては初めてのリスクに関する教育研究機関であり、国際競争にさらされているわが国経済の現状に則し、誠に時宜を得たものと言えましょう。

顧みれば、大正十一年「彦根高等商業学校」がわが国九番目

の高商として金亀城下に産声を挙げてから八十年間、母校は

創立八十周年を祝して

陵水会理事長 岡田 一（大4）

の高商として金亀城下に産声を挙げてから八十年間、母校は

化競争の波にさらされるようになっていきます。

「土魂商才」を建学の理念とし、実学を旨とし高度専門職業人の養成を目指してきた結果、卒業生は二万四千人にのぼり、いずれも実業界を中心に有為な人材を送り出し、わが国の発展に貢献してきたことは、私ども同窓生として大いに誇りとするとこ

ろであります。母校は八十年間にこのように一大飛躍を遂げて参りました。最近の大学を取り巻く環境の変化は著しく、現在の国立大学という形態は、来年度から新たに「国立大学法人法」に基づく法人へと変化し、さらに引き続き他大学との統合が指向されるなど、大学もまたグローバル

そこで経済学部と陵水会は、双方で協力しあってこの八十周

年を契機に、次世代に向かって母校を発展させる基盤となる事業を行うべく、「滋賀大学経済学部創立八十周年記念事業実行委員会」（会長 陵水会理事長 岡田一）を立ち上げ、昨年十一月より活動を開始いたしました。



事業計画の概要は次の通りです。

まず基本目的としては「二十世紀における滋賀大学経済学部のグローバル競争戦略」を支援することとし、①「リスク」を戦略的研究分野としてトップクラスの研究・教育水準を目指

するための事業 ②創造性育成を重視した学生教育強化のための事業を、二本柱としています。

次に事業計画の内容としては、平成十五年度中の記念事業と中期（五～十年）事業の二つのカテゴリーに分けて計画されています。

十五年度事業の目玉は記念式典、祝賀会と八十周年記念フォーラムです。

式典は、今年十一月三日母校で開催されますので、出来る限り多数のOBの参加を期待しています。また、記念フォーラムは四回開催することとし、そのうち一回は陵水会主催で実施する予定となっております。国際化情報化時代にふさわしいテーマで、実業界で活躍中のOBによるパネルディスカッションが計画されています。また、中期事業としては、経済経営リスク研究の中核となる「リスク研究センター」の設置、陵水記念国際フォーラムの開催、海外研究者との交流、新陵水寄付講義「起業家論」「地域創造論」の設置等が計画されています。

以上の事業を実施するためには、言うまでもなく多額の資金が必要であります。現在の厳し

※次ページ下段に続く

平成十五年度東京支部総会迫る 大十五回卒幹事の熱意ここに結集

平成十五年度東京支部総会
は、開催年度に数字が該当する
卒年次が当番幹事に当たること
から、昨年度大十四回卒に続き、
大十五回卒が幹事を担当、企画、
運営に当たることとなった。

開催日程の決定、特別講演の企
画など苦勞を重ねてきたが、幹
事諸氏の情熱と努力により、左
記の要領で開催の運びとなっ
た。

特別講演は、母校の中小企業
論・経営管理論ご専攻の戸田俊
彦教授による「今、成功する企
業家・ビジネスマンの条件」と
いうタイムリーなテーマで行わ
れる。同教授の薫陶を受けたゼ
ミ生始め、若い会員諸氏の積極
的な聴講を期待する。

幹事は語る

若い力で総会を
成功させたい！

陵水会東京支部の平成十四年
度の総会は、大十四回卒業の有
志が当番幹事となって準備が進
められ、開催年度と同じ卒業年
度の有志が幹事を担当するとい

う「約束事」のなかでの初めて
の総会でした。

小口晃、古山捷次郎、北村徹
の各先輩（いずれも大14回）を
中心に、新しい着眼点や手法で
企画された総会は、出席者が一
二〇名を超えたといい盛況で、
好評裡に幕を閉じたことは支部
会員各位のご記憶新たなことと
思います。

私たち大十五回の有志が平成
十五年度の総会準備に着手した
のは、昨年九月のことでした。
昨年の総会の「良かった点」を
総括するなかで、私たち十五回
幹事の特徴も出していこうと申
し合いました。

滋賀県にゆかりのある会場、
リーズナブルな会費、クラブ活
動OBを巻き込んだ動員力強化
策など、前回総会の企画は大い
に参考になりました。

さて、企画を具体化するなか
で、まず日程（当初は六月上旬
の金曜日）と会場都合とのミス
マッチに直面し、日程の変更を
支部役員・幹事会に諮り直すと
いう一幕がありました。

総会での講演者の人選にも
紆余曲折がありました。「知名

度のある講師は動員力につなが
る」「さりとして台所事情は苦し
い」「懇親会主体の組み立てな
ら講演は必ずしも必要ないので
はないか」「大学の再編・統合
の進捗をぜひ聞きたい」など先
輩諸兄の間で議論百出。決定に
至るまでに四ヶ月かかりまし
た。ただ、これらの議論は、
「総会を盛り上げたい」という
強い気持ちの表れであることに
違いなく、当番幹事としては納
得また感謝の思いで一杯です。
小池支部長、箸方幹事長には時
に応じてお力添えをいただきま
した。

延べ六回に及ぶ当番幹事の会
合を重ねました。先輩諸兄の期
待を裏切ることはできません
し、昨年に比べて見劣りする内
容だったというコメントをいた
す。延べ六回に及ぶ当番幹事の会
合を重ねました。先輩諸兄の期
待を裏切ることはできません
し、昨年に比べて見劣りする内
容だったというコメントをいた
す。

延べ六回に及ぶ当番幹事の会
合を重ねました。先輩諸兄の期
待を裏切ることはできません
し、昨年に比べて見劣りする内
容だったというコメントをいた
す。

平成十五年度総会の概要

- (1)日時 平成十五年六月二十五
日（水）午後六時から
- (2)会場 東織厚生年金会館
中央区東日本橋三ー六ー二十
電話〇三ー三六六一五三七一
- (3)会費 六千円
- (4)概要

※前ページより

い経済情勢の下で、お願いする
のは誠に心苦しいのですが、母
校の将来の発展のため、一人で
も多くの陵水会員の皆様に応分
の寄付を頂くようお願いする次
第です。

募金趣意書、募金要綱は皆様
のお手許に届いている筈で、す
でに応募頂いた方もあるうかと
思いますが、お済みでない方は
是非ご協力くださるようお願い
します。

なお、個人募金とは別に、各
企業に対しても同様の依頼をし
ていますが、現在のデフレ経済
の下では、容易なことではあり
ません。実行委員会の企業募金
部会が主体となって活動してい
ますが、会員の皆様にも側面的
にご支援いただくよう併せてお
願い申し上げます。

終わりに、国立大学としての
滋賀大学経済学部は奇しくも八
十周年を迎えた今年が最後の年
となります。その意味で八十周
年記念行事が、輝かしい歴史を
回顧すると同時に、母校の未来
に明るい展望が開かれるよう全
陵水会員の参加により成功する
よう願って、お祝いのご挨拶と
いたします。

母校大学院博士後期課程の発足と創立八十周年を記念して

三月一日（土）、午後一時から、彦根市のホテルサンルート彦根三階「金亀の間」において、母校の大学院経済学研究科博士後期課程「経済経営リスク専攻」の発足と経済学部創立八十周年を記念して、公開講演会「リスク時代の経済運営と企業経営」が開催された。

当日は、一般、大学関係者、学生、大学OB等約三百人が聴講に訪れ、会場は満席の盛況ぶりであった。講演会は、有馬敏則教授の総合司会のもと、北村裕明経済学部長の挨拶と博士後期課程「経済経営リスク専攻」の発足についての説明に続き、

宮本憲一学長（報告一・リスク時代の経済運営）、酒井泰弘経済学部教授（報告二・リスクの経済学とは何か）、高田紘一滋賀銀行頭取（報告三・リスク時代の企業経営―金融業からの視点―）、渡辺捷昭トヨタ自動車

副社長（報告四・リスク時代の企業経営―トヨタにおけるリスク管理―）の講演と発表が一人二十五分から三十分をかけて行われた。

休憩を挿んで、パネルディス

カッションが、コーディネーター・宮本学長、パネリスト・酒井教授、高田頭取、渡辺副社長が担当して進められた。小川功経済学部教授による、リスク研究センターの説明と閉会の辞が終了したのは、午後四時を回っていた。

この後、同ホテル二階「八千代の間」において、博士課程担当教官による大学院博士課程入学に関する個別説明会が開催された。

聴講者の感銘と評価は高く、博士課程「経済経営リスク専攻」へ大きな期待を寄せていることが窺われた。なお、従来の修士課程は博士前期課程となる。

◎宮本憲一学長の講演レジメ（要旨・図表略）

一 リスクの時代

日本は災害が多く、しかも国土が狭隘な上に、集積利益を求めて、都市化が進んでいるので、自然災害や社会的災害（公害や事故）というリスクが、他の先進国に比べて多い。第二次大戦

後、科学技術の急速な発達が人間の身の丈や判断力を超え、しかも効率を優先して安全を後回しにするために、新しいリスクが次々と生まれている。市場制度はもとよりリスクを前提にした経済制度であるが、経済のグローバルゼーションが、国民経済や国民国家の枠組みを越えて進み、それに対応する法制、税制や行政機構が整備されてい

ず、しかも、アメリカの支配力が強いために、国際的な規模でのリスク（戦争、地球環境問題、南北問題、金融リスクなど）が広がっている。今や、経済運営の上でのリスクの認識、リスクの予防やリスクの管理は最も重大な課題となりつつある。

二 環境リスクの教訓

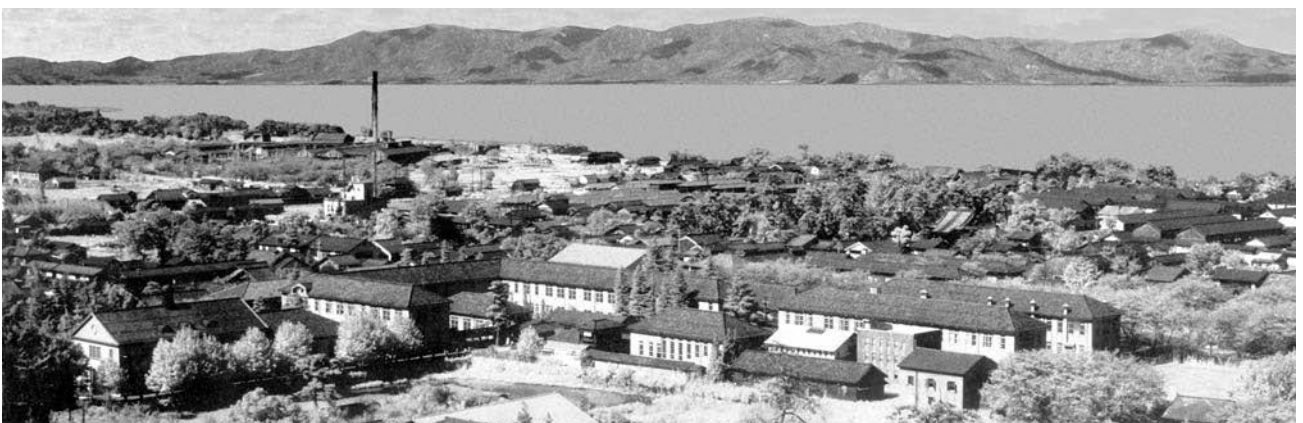
(1) リスクの管理の失敗例―水俣病と四日市型公害―有機水銀中毒については、一九三〇年代のドイツの労働災害の研究、亜硫酸ガスについては明治初年からの日本の銅精錬過程の公害で対策が解っていたにもかかわらず、失敗。その結果として防止のための費用よりも多くの補償

金を負担した。その後巨額の公害防止設備投資を短期間に負担した。しかも基本的に解決していない。(2) リスクの管理の成功例―一九三〇年に住友金属鉱山は世界最初の排煙脱硫装置の開発に成功、その回収した硫黄で硫安を造る住友化学を創設した。住友の社史には「災いを転じて福と成した」。戦後、日本の自動車業界は、乗用車について、世界に先駆けてマスキー法の規制を達成し、これによって燃費の改善など画期的な技術開発に成功して、一躍世界最高になった。

三 これらの経験から

(1) 情報の蒐集と第三者に対するリスク予想の想像力と対策の決断、何よりも予防。(2) リスク発生時の責任（時間の関数）。(3) 補償原理の確率。

公開講演会「リスク時代の経済運営と企業経営」が開催



創立 35 周年（昭和 33 年）当時の母校全景

「一陵会」卒業五十年と陵水八十年を記念して 「陵水歌集とCD」—金亀城下の若き日々—を企画・編集

ることが明らかに。ここで、急遽当初計画を変更拡大して、彦根高商校歌に始まり、見いだされた全ての歌を一括した



旧本館前景

☆経済学部学生歌
(城山に緑も深く)

★滋賀大学学歌
(遠がすむ琵琶の湖)

★彦根高等商業学校校歌
(見よ漫々として)

(一) 校歌・学歌の部

それでは、ここに歌集の内容を紹介したい。

今後、大学も統合化や民営化で徐々に変革を遂げるであろう。そのなかにあって、この「陵水歌集」が、母校の伝統を後世に語り継ぐ一つの証になれば、われわれ「一陵会」のささやかな願いも達せられるであろう。

それは、永久に消え去るという思いも込めて、母校の歌の原典にならんことを念願するものである。

し出した文化であり、時代の証言でもある。しかも何時しか消え去るものである。われわれは、単なる青春へのノスタルジーではなく、新旧学制度の転換期に在った縁から、諸先輩が残した学生歌をまとめ、経てきた時代の資料として後世に正確に伝えることに義務を感じた次第である。

☆剣道部

☆漕艇部(西征歌 ああ水郷に)

(三) 部歌

☆追遙歌(都の塵をのがれ来て)

・蒼虬寮寮歌(狂瀾怒濤の)

★偲聖寮寮歌(眼もはろばろと)

(金亀城下の夕まぐれ)

☆自由の園に
(滋賀の都に春ゆいて)

・希望の岸に
(春の野遠く霞立ち)

・紅深き(紅深き朝日影)

・影を一夜の(影を一夜の)

・春浪軟き(春浪軟き琵琶の湖)

・記念祭の歌(若き心の憧れの)

(二) 寮歌の部

・琵琶湖哀歌
(遠くかすむは彦根城)

(注) ★印…陵水七十周年記念として、既にCDに収録済。(陵水会本部にて頒布中)

☆印…今回、陵水八十周年記念として、CDに収録したもの。(陵水会本部にて頒布中)

☆ヨット部エール
(白きかすみに)

☆柔道部(嗚呼純情の士)

☆弓道部(嗚呼混沌や)

☆弁論部(嗚呼純情の士)

(四) 付録

・高商音頭・高商の書生さん

・春の霞に・高商小唄

・オイサ行こうよ

彦根小唄

☆琵琶湖周航の歌
(われは湖の子)

・高商音頭・高商の書生さん

・春の霞に・高商小唄

・オイサ行こうよ

彦根小唄

☆琵琶湖周航の歌
(われは湖の子)

・高商音頭・高商の書生さん

・春の霞に・高商小唄

なお、八十周年記念募金に協力していただいたなかで、希望者に本記の歌集、CDを贈呈する事になっている。

(担当 一陵会)

「プロ中のプロ」

一流と言われる人々から学んだこと

スポーツ評論家 石川 顯氏 トークショー

(本稿は、平成十四年六月六日、
陵水会東京支部総会における講
演の一部を掲載するものです。)

編集部

私は昭和三十九年(一九六四
年)にアナウンサーになりました。
東京オリンピックをやつて
いる時、「この番組は松下電器
の提供でお送りいたします」な
あーって、当時、生ですからオ
リンピック放送のコマーシャル
を読んでいたんです。そのオリ
ンピックの終わった後の私の初め
の仕事というのが、「東京オリ
ンピックを支えた人々」とい
うラジオの小さなインタビュ
番組でした。男子百メートルの
決勝、ボブ・ヘイズという、当
時の世界新記録で優勝した人の
すばらしいレースに、「ヨイ
ドン」というスターターを務め
た佐々木吉蔵さんという方のイ
ンタビューでした。

「私は、昭和十一年のベルリ
ンオリンピックに百メートルの

日本の選手として行きました。
でも予選を落ちたときに、あつ、
世界では通用しないんだ、じゃ

あ、世界で一流のスターターに
なろうということ、二十八年

間務めてきました。やつと東京
オリンピックの決勝のスタータ
ーをすることができました。た

だあのレースは私としては失敗
だったんです」「えっ、なぜで

すか」「私は二十八年間スター
ターをやつていて、世界でも一

流というふうには認められまし
た。で、私のスタートのタイミ

ングというのは、ヨイからド
ンまで一・八秒が自分のベスト

のタイミングだと思って、ずー
っと引き金を引いてきました。

ですが、その時は、ヨイから
ドンまで一・六秒で引いてるん

です」「でも、そんなことは世
界中、誰も気が付かないんじや

ないでしょう」「はい、恐らく
誰も気が付かないでしょう。で

も、自分が気が付いてしまった

ら、自分の敗北なんです。男の
仕事とはそういうものなんで
す」。

一流といわれる人達にお会い
して感じることは、すべての人
が、皆さんプラス思考です。

ただ者でないイチロー

それで、野球でいいますと、



イチローですよ。イチローが
高校を卒業して二年目の夏だっ
たと思います。ジュニアオール
スターに選ばれました。MVP
は百万円貰えます。東京ドーム
のゲームでした。ホームランを
打ってイチローは、百万円貰っ
たんです。まだ十九歳の少年が
百万円貰えれば、私がそうだっ

たら、「よし、これで風俗にい
ける」なんて、まず考えます。

プロ野球の選手はたいがいそう
です。イチローはどうしたか、

皆さん。翌日です、球団の社長
に「この百万円、神戸市の恵ま

れない施設に贈っていただけま
せんか」「へーえっ」。球団の社

長、びっくりしちゃいました。
「イチロー君、それはお父さん

に相談したのか」「父と相談し
ました」「あーそうか」。早速、

オリックスの宮内オーナーの所
に球団社長、電話を架けました。

「こういうこと、うちの選手が
言っとります」「それは感心な

ことだ。それはどうぞ、施設に
贈って下さい。僕からイチロー

君には百万円プレゼントしてあ
げましょう」。イチローはこう

いう性格の選手です。

日本のサッカーをここまでも
つてきたいろんな人がいますけ

れど、やつぱり、カズこと三浦
知良ではないかという気がい

たします。彼がブラジルまで行
って日本に帰ってきて言ったこ

とは「俺がワールドカップに連
れて行く」。当時のサッカー担

当の新聞記者もアナウンサーも
「ワールドカップに日本が入れ

るわけじゃないか、まだ五
十年早いよ」と一笑に付しまし

た。その三浦知良が今年のワー
ルドカップ前、どうしていたか。

五月三十一日開幕です。その数

日前に日本の登録選手は締め切
られます。「もしかしたら俺は

呼ばれるかもしれない」と、そ
の数日前まで一所懸命走りこん

でいたそうです、いつ呼ばれて
もいいように。これがやつぱり

プロじゃないかと思うんです。
私たちから一流と呼ばれる人

は、絶対準備します、研究しま
す、勉強します、努力します。

その準備の段階で一番大事なこ
とはまず時間を守ります、一流

といわれる人達。

遅刻は厳罰

例えば、野球のチームの中で、
日本で今まで一番強かったの
は、やつぱり九連覇のジャイア
ンツです。あの記録は今後まづ
破られることはないでしょう。
あるとき私が質問したことがあ
るんです。「川上さん、ジャイ
アンツは罰則もなかなか厳しい
んですが、ペナルティで一番大
きいのは何ですか?」。私は、
監督の批判かな、コーチを批判
することかな、あるいは、待て
というサインの時に打っちゃう
ことかなと、いろいろ想像しま
した。川上さんの答えは簡単に

した。「一番重いペナルティ？それは遅刻だよ」「遅刻ですか」「神様は、チームの人間、裏方さんに始まって、監督、コーチ、選手、別け隔てなく一日二十四時間という時間を公平に与えてくれている。一人の選手が、二軍の選手でも控えの選手でもいい、集合時間に十分遅れたとしたら、チーム全員五十人で動いてると、五百分の損失になる、これはものすごい量なんだ」と。「二分遅れたら五十分の損失になる。これが一番重いペナルティなんです」。で、その良い伝統が今も守られておりまして、巨人からいろいろのチームに行った選手が伝えたんでしょうね。皆さん、野球の選手の集合時間、びつくりしますよ。

さて、私たちが子供の頃、お相撲さんで一番強いと思ったのは、私の場合は栃錦でした。当時、技巧派力士といわれておりました。栃錦が横綱になりました。栃錦は技能賞を七回とっておりまして。ところがその栃錦を凌ぐ技巧派といわれる力士が現れました。これは寺尾さんから聞いた話なんですが、栃錦が、まさに日の出の勢いで優勝を重ねている時です。栃錦以上の技巧派だといってぐんぐん力をつ

けて来ましたが、逆鋒、寺尾のお父さんの関脇・鶴ヶ嶺です。昭和三十一年大相撲夏場所九日目のことです。さあ日本中が注目いたしました、どっちが日本を代表する技巧派の力士なんだろうと。時間一杯になって両者立ち上がりました。諸差しになったのは鶴ヶ嶺です。立つや否や右を差し左を差し、どんどんどんと電車道寄ってきます。あーっつ、一気に栃錦が寄り切られたと思ったその瞬間、徳俵の上をポーンと鶴ヶ嶺の左の足の指、親指が超えてしまいました。勇み足です。「うわーっつ、俺の負けだ」。分かっているんですけども、鶴ヶ嶺は悔しいものですから、どどどーっつと、そのまま寄り倒してしまいました。

ます。そのしーんとしている国技館の館内に、「おーい、鶴さんよー、ちょっと手を貸してよー」。勝負の決まった後、寄り倒してしまった自分より先輩の横綱のその声を聞いた時に鶴ヶ嶺さんは「うわーっつ、この人はなんと器量のかい人なんだろう、懐の深い人なんだろう、



勝負の決まった後、寄り倒して手を出さずに行ってしまった俺を憎まない幅の広さ。これでは、俺は人間的にかなわねーやとあの時思った」と、寺尾さんに話したそうです。その三十一年の九月場所まで栃錦対鶴ヶ嶺は一勝一敗でした。ところがその後、二人の対戦成績は栃錦の十勝一敗です。つまり、鶴ヶ嶺は、この人に人間的にはかなわねーやと思ったその瞬間から、勝負にならなかったわけですね。

人間性で勝負

そこで思い出すのはボクシングです。日本では、チャンピオンになりますとボクシング協会から認定書が送られます。チャンピオンはいつ、いかなる時、誰と戦っても常に勝者でなければならぬと書いてあるんですが、その認定書の裏には、「技術で勝てなければ練習量で勝て、練習量で勝てなければ頭で勝て、それでも勝てなかったら人間性で勝て」と書いてあるんです。あの非常に技術的な、純なスポーツにも、やっぱり人間性ということが謳われているわけなんですよ。

「やっぱり一番はあの舞台です。三時間近い私のステージなんだけれど、幕が開いた瞬間、一番前に座ってる中学生くらいの女の子が寝ちゃったのよね。よし、俺の演技力でこの子を起してやろう」。そう思っ、いつになく大熱演だったそうです。歩くときは大きく靴を踏み鳴らし、大きな声を出すところはいつも、小さなところではより一層小さく、メリハリつけたすばらしい演技だったそうです。ところが最後までそのお嬢さんは寝っぱなし。で、舞台が締まって幕が降りても、アンコールの拍手が鳴り止まなかったそうです。また幕が上がりました。前の女の子、まだ寝てるかなあと、立ち上がって「わーっ」と。よく見るとそのお嬢さんは全盲のお嬢さんだったそうです。「ああそうか、この娘さんは目が見えない。だったらステージの俺の声を、あるいは歩く動作を少しでも他の人よりも一所懸命聞いたのかと思うと泣けて泣けてねー」。

こんにちは

陵水会東京支部幹事長

箸方 海三氏（大4回）

今回は陵水会東京支部の幹事長として、支部の発展、活動に多大のご尽力をいただいている箸方氏を、去る三月十三日、練馬区光が丘のご自宅にお訪ねしました。

〒一七九—〇〇七二

東京都練馬区光が丘七—六—十二—四〇九（春の風公園街）
電話〇三—三九七九—八四七三

—こんにちは。永年、幹事長をやっていたのですが、何年になりますか。

（箸方）七年ぐらいかな。川本

支部長（大1回）と亀井幹事長（大2回）との時、亀井さんが故郷の岐阜へ帰られることになって、幹事長不在の時期が長くて、川本さんが大変な様子だった。大学一回の故・萩原さんとか、三回の田中さん、十七回の柴原さんに何度か呼び出されてね。海外で半年くらい暮らす計画だったので固辞していた

が、年四回開催の陵水会ゴルフの幹事をやっていた関係もあり、川本さんのご苦勞に報いるため、次の後任が決まるまでなら手伝いましょうということになった。

陵水会ゴルフは平成二年の三月が第一回。それ以来、年四回を十三年間やって、今度の四月九日にやるのが五十三回ということになる。ゴルフを通じて、先輩、後輩の顔とか名前を覚えてるわけね。高商の古い方とも、ゴルフのお世話をして顔馴染にもなった。

—うってつけですよ。

（箸方）いやいや。当時は総会には四十〜八十人ほどしか集まらなかった。ゴルフ、囲碁を通じて総会の活性化も図られるという考えで始めたんだ。

—ゴルフはよく続いていますね。

（箸方）継続は力なりというように、一回でも面倒になったからといって止めちゃったら切れてしまうから、とにかく続けてれば同士が集まるということだね。一番最初なんか、十二名だった。小池さん、川本さん、葛上さんはご夫婦でお見えになってたね。四十名位まで増えたこともあるが。最近はやっと減

ってはいるが、楠田さん（本24回）のお世話で金乃台CCで楽しい会を続けている。

—会社（丸三証券）でのことをお聞かせ下さい。

（箸方）総合企画とか大蔵番ね、所謂MOF番だ。店舗行政とか、中長期計画とか会社システムを担当していた。総務の時には組合関係とかね。



元気なうちに世界を

—在職中から海外は何回もいかれてたんですか。

（箸方）そう、仕事でも何回かね。最初は、生産性本部の連中と世界を視察して回ったりしてね。また電算システムでは、IBMから富士通にリプレースしたので、富士通と欧米の証券会社のシステムを見て廻ってた

ね。あとは休暇をとってカナダへ遊びに行ったりしてね。カナダはスキーに二回、夏にも行き、秋の紅葉も見に行っている。

—スペインでの夢を実現するために、会社を早く辞められたとかお聞きしていますが。

（箸方）当時は、大手四社とか準大手十社とか、総合証券しか株式の上場が許されてなかったのね。たまたま、私が上場準備委員をやって、株式の上場に漕ぎつけた。だから一つの目標達成ができたということが先ず一つ。役員してて、二十何年間で自社株も結構持ってたから。元気なうちに自由になって、世界を旅行しようと思ってバブルの異常な市場にも見切りをつけ、五十五にして男は立つとして、ポーンと辞めたんだ。

—世界各地へ出かけられたんですか。

（箸方）殆んど世界各国廻ってたね。多少行っていないところもあるが。当時、観光はアメリカが全盛時代だったが、どうせ行くならアクティブに、スキーもゴルフもやりたきゃ、ヨットにも乗りたいし、若くて元気なうちにと行ってね。六十とか六十五になって辞めたって、遊ぶ時間がないんじゃないかとね。

—何ヶ国くらい廻りましたか。

（箸方）ヨーロッパ、東南アジア、中国は殆んど全部ね。行っていないのは旧東欧のユーゴとブルガリアとルーマニア。エジプトも当然行ってるけれど、アフリカだけは少ないんですよ。ナイロビなんか行きたかったんだが。南米もブラジル、ペルーは、竹内、佐々（大4回）と一緒に例のフジモリ大統領時代の日本大使館が占拠された直前に行ってたしね。

—私なんか非常に単純なんだよね。例えばイグアスの滝、ナスカの地上絵が見たいから南米へ、中国ではシルクロードとか万里の長城を歩いてみたとか、秦の始皇帝の兵馬俑を見に行くとかしたね。平山郁夫さんが三越でシルクロードの展覧会を開いてたときに、「箸方さん、莫高窟へいらっしゃるなら早く行きなさい。人間が出入りすると呼気とかで、湿度や温度が変わって駄目になっちゃうのよね。乾燥地帯にあるから、今まできれいに保存されていたのが、そのうちの美術価値の高いものは閉め切りになって、余程のことがないかぎり、見れなくなりますよ」といわれて、すぐに飛んで

行こうと思ったら、例の天安門事件で行けなくなった。それで一年遅れだったが。

エジプトの時も行く二週間前に、ハトシェプスト宮殿テラスの銃乱射事件があり、キャンセルで二年ほど遅れてしまった。中国も三峡下りというのがあって、新三峡ダムを建設中だから行くなら早く行かないということとで、急いで行ってきた。

ヨーロッパは、日本から行ったり帰ったりすると時差で大変だし、金も高い。だからスペインに居住して、スペインを根拠地にヨーロッパを廻ろうと。スペイン語は日本語と同じ母音語で非常に発音しやすいが、フランス語は発音が難しくて自信が



ない。日本人にはスペインは住みやすいよね。「世界で学び、遊び、生きる会」に参加して、「ワールドステイクラブ」を作った。それが今でも続いているよ。情報交換して、企画旅行も兼ねた視察旅行とか体験滞在したりしていて、自然に旅の仲間の人、友人が増えてね、それが楽しいね。

陶芸は玄人はだし

——先輩からいって、旅行とは何なんですか。好奇心とかですか？

（箸方）世界遺産に登録されているところや、好奇心を掻き立てるところに行くことまあ、何でも見てやろうとか、兼高かおるみたいなもんで。ある時、兼高かおるが世界中で一番住みたいところは、オーストラリア西海岸のパースだと言った。それ聞いた途端に行きたくなつてね。同期の竹内君と原澤君の三夫婦で安い切符を探し、行ってきた。そういうことを体験できるのはやはり人生の喜びだよな。

——話はかわりますが、陶芸はいつごろからですか。

（箸方）広島支店長とか名古屋支店長をやっていた頃から客先

でお抹茶を頂く機会が多く、殊に美濃とか瀬戸とか常滑もそうなんだけれど、名古屋は焼物の街だよな。我々は金融関係だったから瀬戸信金、多治見信金とかの理事長室へ行くとな、地元

の有名な作家の作品が一杯あって、これはいいですねというて、これはかくかくしかじかと言つて、仕事そっちのけの話になるわけよね。帰りに時間があつたつたらということになって、窯元に寄るといふことになって、目だけ肥えてね。

——焼くのはいつからですか

（箸方）それは会社を辞めてから。安藤百福さんの日清食品（株）はうちが幹事で株式を公開したけれど、安藤さんに本阿弥さんという方が陶芸教室開くから、やってみたらどうだと誘われたのが最初だね。平成二年に本阿弥先生に師事したの。次いで平成三年に光が丘へ井野喬先生が教えに見えたんで、ここにも入門したのよね。だからもう十二（三年経ってるかな。茶陶が中心で、いろいろの公募展に入賞、入選し、個展も二回開きました。

——酒との付き合いは

（箸方）生まれは、神戸に縁があり、子供のころから酒蔵にた

まに遊びに行つて、小学生から飲んでたね。休肝日無しでも肝機能は最高だ。いい酒しか飲まないからね。

今の灘や伏見は、タイ米の粉を関税の関係で菓子原料として輸入し、その粉の中に入ってる砂糖を、遠心分離機に掛けて、飛ばしちゃつてその粉で酒を作つたり、地方の蔵の「白ぬか」を買つてるわけね。米だけの酒といつてるが……。こういったところは化学工場のパイプラインみたいで、一週間でできちゃうんだ。それに較べて、例えば今津のこの「琵琶の長寿」なんかの酒は五十日とか六十日、杜氏が温度管理とかを一生懸命やって作る酒だから元が違ふよ。材料も原料も何もかも違う。

——最後になりますが、母校創立八十周年のことです。

（箸方）この不景気の時に寄付だといったらアレルギー起さねかねないし、その拒否反応を何とか和らげて、やらなければね。企業部会、個人部会に分かれてるが、企業部会は支部長と福島君（大4回）が頑張っていてくれる。企業は今期決算での寄付金扱いになるからね。個人の寄付をいただいた人には寮歌集などのCDを差し上げるこ

とになっている。

大学には大学院博士課程も誕生し、学部の研究・教育の振興助成をはじめ、リスクマネージメントを中心とした、その学術研究活動の助成を目的に募金活動をやると、応分の協力をお願いしたいと皆にメール等でお願ひしている。他人事と思つたら終わりなんだから、同期同窓の縁を大事にしていかなければね。彦根の街は小さな街で、さつきの寮歌とか校歌とかでも、結構郷愁があると思うけれどね。そのCDなんか若い人なんか興味を持ってくれるといいけれど、高商、大学二十回くらいまでがターゲットかな。

——いろいろ今日はありがとうございました。



お手製酒器の一部

一、柔道しかする事がない

小生が足を踏み入れた最初の外国がサウジアラビアとクウェイトの国境にあるカフジであった。

現在ですら、日本の感覚で言

うと原油生産基地を囲む村程度の構造であるのに、二十年近い昔の話であるので見事に何も無く、基地周辺にはホームレスの住居にも思える日干しレンガで作った現地人の家が点在するだけで、その向こうには荒涼たる砂漠、土漠が続くだけであった。時間と空間だけは必要以上に潤沢にあると云った風情に、正直な第一印象は「シマッタ、とんでもない所に来てしまった」であった。

その後、駐在勤務、業務応援、調査出張や旅行等で世界二十カ国を回ったが、最初に一番ひどい所を見たメリットで、何処の国を訪問してもがっかりした事がない。日本人租界に閉じ籠もり、現地社会と交わりもせず、仲間と砂漠ゴルフや麻雀に没頭して任期の満了を待つといった彼地の平均的日本人ビジネスマンにはなりたくなかったが、かといって他にすることも見出せない土地柄の

事、小生の場合は柔道しか出来る事はなく、現地赴任半年後に基地創業当時の食堂の廃屋を再生活用して二十八畳の道場（一年後に四十畳に拡張）を開設した。

砂漠の中の柔道場

岡本 文夫 (大18回)

本稿は筆者が平成10年1月に、母校柔道部の部誌「和」に寄稿されたものである。極めて貴重な体験を述べられており、読物として興味深く、示唆に富む記述も多い。全文をご紹介したいと掲載を工夫したが、紙面に限りがあり、本紙1ページ分程を割愛させていただいた。この点筆者にもお詫びしたい。 編集部

二、柔道活動定着迄の

苦勞と喜び

道場開設当初の参加者は日本人的発想に於ける「入門」などという謙虚さは全くなかった。

それは力比べであり、指導者

に対する挑戦である。つまり、「こんな小さな日本人が強い筈あるか」という訳である。下手して不覚を取る様な事でもあれば、昔は強かったなどという言い訳は通用せず、その黒帯を寄越せと言うのがアラブ人のメンタリティなのでこちらも真剣にならざるを得なかった。

小生の一回目の現地赴任の任務は、原油の出荷（シッピング）部門への船積み書類と経理諸統計合理化の為のIBM導入であったのだが、スタッフ達は従来通りの計算ミスだらけの手作業式事務処理に固執して小生の指導にはなかなか従わなかった。部下の一人、ハムード君は米留学帰りの鼻柱の強い男であった。一種の資源ナショナリズムの現れであろうか、彼には上司が日本人という外人である事が気に入らないと見えて、小生がコンピュータオペレーション訓練を施そうとすると「I am thinking something now」などとはざいて従わず、小生のこめかみに青筋が立ったのは二度や三度ではなかった。留学中に柔道を経験していたと言う彼は日頃の感情的対立も手伝って、或る日小生に挑んで来た。小生の道場には、日本人をや

つつける所を見るのを楽しみにして彼のギャラリー十名程が集まり、アラビア語で声援を送っている。挑み方が堂々としているので、ひよっとすると小生より強いのではないかと危惧を感じながら、ウォーミングアップは指立て伏せから入る事にした。ところが、ハムード君には初めての運動であつたらしく一



回も出来ず、彼を驚かすには十分効果があつた様だ。

最初から果し合いは完全に小生のペースとなった。打込みをやらせても、言う程大したものではないのが解り、後は立つ、寝る、締める等相手が立てなくなると観察される。親愛なるハムード君は、その翌日からは小生への会話には必ず「Yes Sir」をツキリ決着を着けておこうと言

う訳である。しかし、ここで難しいのは、立てなくなった相手に仲間の環視する中で屈辱感を与えては人間関係の決裂となる。そこで、小生は救いを与えた。「どうした、ハムード。俺は知ってるんだよ。お前は本当はもっと強いんだ。今日は何か調子が悪いんじゃないか？」彼はうつ伏せのままの苦しい息の下から答えた。「ええ、今日は煙草を吸い過ぎました」「そうだろう、そのせいに違いない」。そのやりとりの結果、彼は連れて来たギャラリーに対して最低限の面目は保てた筈である。余程深いトラウマを与えてしまったのか、その後ハムード君が道場に足を踏み入れる事は皆無だったが、面白い事にその時野次馬として小生が伸ばされるのを楽しみに集まった十人全員が即座に入門した。

サウジアラビアは、その石油資源量故に国際社会で独特のステータスを得ているものの、その国情はまだまだ発展途上国であり、発展途上国の人間は力に対しては非常に素朴で素直であると観察される。親愛なるハムード君は、その翌日からは小生への会話には必ず「Yes Sir」をつける様になり、フル・センテ

ンスを話し終えなくてもこちらの意を察し、テキパキと動いてくれる様になり非常に仕事やり易くなった。

桃太郎ストーリーの様な類似の過程を何度か経る事により、半年後には小生の柔道活動への理解は定着し、弟子の数も着実に増加して行った。弟子の数が五十名に達した頃、カフジの村に一軒だけあった倉庫の様なスポーツ用品店が遂に柔道着を置く様になり、こんな世界の田舎に柔道着の需要を創造したかと思えば気分が良かった。狭い道場なので、弟子の増加に応じた安全対策として、大人、少年、子供の三部に分けた週三回の稽古となり、小生自身、高校の柔道部並みの稽古量は確保出来たと思う。

三、第一次柔道活動のハイライト

ハイライト

三年半の活動の中で二件ばかり特筆するべきエピソードがあるので紹介しておきたい。ただ、日本国内の一般常識から少々外れているので、おっかない十河剛先輩（大学15回）あたりから「ほんまか、お前」と一言ありそうなのが、本当の出来事なので聞いて頂きたい。

カフジ村の年間の最大の行事はカフジ・マラソンと称する十五キロレースである。国技であるサッカー場だけは村に不釣り合いな立派な施設があり、これをゴール地点として毎年一回、マラソンが行われる。面白いの



道の弟子の中の足の速い者達と走り込んでいた。

ところが、競技会運営をもう少し意義深いものにするべしという知恵者が州政府にいたらしく、会社宛に「最近、カフジに於いて柔道の指導を行っている岡本なる者をして、カフジ・マラソン当日、サッカー場に於いて柔道のデモンストレーションを行わせるべし」との命令書が届いてしまった。これも中東で柔道をする上で良い記念かと、小生は弟子と畳と共にサッカー場へ。カリリッド州知事殿下始めローカル・ガバメントのお歴々及び三千人の観衆に柔道演武を見せる運びとなった。

「お前、今一体何処を喋ってんねん?」という訳である。

もう一つのエピソードは日本人として初めて（多分最後でもある）隣国クウェイトの国体に出場する機会を得た事である。クウェイトでは前述の甲斐七段が十年に亘り柔道の普及と体制整備に努力をされ、毎年度重別選手権やオリンピック、世界選手権の代表選考といった公式競技会が開催されていて、これらは勿論クウェイト国籍を有する者だけが参加を許されていた。

相手は柔道と空手の区別も解らぬ連中であり理屈っぽい事を演じて退屈させるだけなので、素人受けするシナリオを考えた。ウォーミングアップにはヘッドブリッジで反対側にビヨンプイヨン飛んで見せる。弟子達を屈ませておいて、その上を前方回転で何回も飛び越えてみせる。青少年の弟子を十人掛けで各種の技で投げて見せる。子供の部の弟子相手の五人掛けではこちらが散々に投げ飛ばされる。観衆の「ウオー!」と言う反応を楽しみながらデモは進行したかという、残念乍ら必ずしもそうは行かなかった。何故なら、素人に理解させる為にデモの進行に合わせた説明を小生が英語で準備して部下にアラビア語訳させたものを大会事務局に手渡ししておいたのだが、説明役が三千人の観衆を前にして完全にあがってしまい、どうも小生の動作とシンクロしていない様子。しばしば演武を中断して「お前、今一体何処を喋ってんねん?」という訳である。

査するべく、同国柔道界のドンとして君臨する甲斐七段のバックアップを得て出場が叶った。

甲斐七段の演出でナショナル・チーム三十名に混じった唯一の外人として第一シードされて第二回戦から登場した。日本から来た参段のシードエントリーだという事で、小生の実力を知らない対戦相手は完全にビビっており、しかも寝技を良く知らなかったので崩れ袈裟固めの技有りを二つ奪った合わせ技で勝ち抜けた。第三回戦はその年の七十八kg級のクウェイト・チャンピオンであるヒシャム・ラシッド君であり、彼は本当に強かった。激しい動きに翻弄され、殆どこちらの技も放てず腕ひしぎ十字固めで一本を取られて敗退した。それでも、クウェイト国体ベスト八入りしたという記念すべき事実は残った。

埼玉国体に出場した井手清博先輩（大学17回）、茨城国体の長谷川力男君（大学20回）の輝かしい実績には及ぶべくもないが、小生の中東に於ける柔道活動の大きな思い出となる三十五歳の時のエピソードである。では、クウェイト柔道のレベルがどうかというと、寺井与利雄君（大学19回）を連れて行けば、まず優勝

四 まだ道場は存続していた

四年半、本社総務部で広報業務に従事した後、カフジの原油出荷（シッピング）部門の責任者として再度の現地赴任をする事となった。子供達の教育の都合上単身赴任を余儀なくされ、生活上は辛いものであったが、勤務上は柔道が随分小生を助けてくれた。事務所の二十二名のアラブ人の部下の全員とその子弟の多くが前回、小生の弟子として一緒に汗を流した間柄であり、業務上小生に盾をつく者は一人も居る筈が無かった。

諸事無理をしないアラブ人のことであるので、小生が帰任した後は道場はもう閉鎖しているだろうと考えていたのだが、嬉しい誤算で道場は細々ながらもまだ継続されていた。小生が読み誤っていたのは、洋の東西を問わず子供を強く元気に育てたいと願う親の心情であった。無理を嫌う飽きっぽい民族性にもかかわらず、前回、大人の部に所属していた熱心な弟子達が何人かでその子弟に柔道を教えていたのである。四年半のブランクにより少々変な柔道になっているものの、彼等が仕掛けている

大外刈りから袈裟固めに入る連続技は小生が堀部正一師範から教わり彼等に伝えたものであった。前回より任務は繁忙を極めたので、週一回しか時間は割けなかったが、再赴任勤務の四年間に六十人のアラブの若者を指導出来たし、柔道で流す汗が単身赴任の無聊をどれだけ慰めてくれたか解らない。

五 柔道が助けてくれたもの

再赴任後暫くした頃、チョットした買い物のため、カフジの商店街に出掛けた所、まだ運転技術のカンが戻っていなかったで小さな事故を起こしてしまった。彼地で外人が交通事故に遭遇した場合、相手に非があったとしても外人はまず絶対に勝てない。三人の証人により事件



を立証するシャーリア法という独特の国内法に準拠する為に、たとえ誰も居ない砂漠のド真ん中で一対一の事故を起こしても、相手方には「俺、見てた」と言う証人が必ず三人出て来るからである。カフジの日本人の中には、これが原因で拘留所に入ったり、大金を払わされたりして悔しい思いを味わった被害者が何人もいるのが現実である。例に漏れず小生も直ぐに十名程の現地人に取り囲まれた。お前が悪いとアラビア語で機関銃の如く喚き立てる相手に、小生はタジタジとなり、警官が来ない内に（即、収監である）手近の商店に飛び込み事務所に電話でヘルプを求めた。親分の一大事とばかりに弟子でもある部下達十数名が飛んで来てくれ、小生は「やれ！」と言。部下達は相手に倍する怒鳴り合いで事を納めてくれた。

事務所に帰った後、どうやって話をつけたのかを質した所、部族社会を基盤として成り立つアラブ社会では先ず「お前、どの部族の者やねん」から始まり「うちの部族のボス知らんのか」と威嚇を進めつつ話を折衷する方へ導くのだそうで、日本のヤクザも一種の部族社会と思えば

良く似た論理と云えない事もない。怪しからぬ事例ではあるが、柔道のお陰でたままた有力部族であるシャムマリ族の弟子を持つていたのが幸いした。

二度目の勤務は時期的に言うところ、イラン・イラク紛争末期とその後の一年余りの暫くの平和、そして湾岸危機から戦争と戦禍後の復旧という歴史のかつ余り巡り会いたくない期間であった。小生の勤務する現場は国境から十八kmしか離れておらず、すぐそこにはイラク軍の戦車軍団が砲口をサウジに向けていた。死と隣合わせた緊迫した状況に、日本の女房子供からは会社を辞めてでも直ぐに帰って来る様にと毎日催促の電話が来た。

商社や金融の様に、人と金と信用で仕事が出来る業種は湾岸危機勃発直後に湾岸地域から姿を消したが、石油開発利権という一種の不動産を持っている立場は、残念乍らそうは行かないのである。一日で陥落したクウェイトと国際的制裁を受けたイラクの原油生産量合計は五百万バレル／日になり、湾岸危機勃発の瞬間、世界から原油生産量の二十パーセントが消滅した訳で、原油価格の歴史的な高騰は必至であった。

かくしてサウジは臨戦の危機の中、アメリカの軍事保証を頼りに大増産の先頭に立つ事となった。小生の現場も大増産の枠組みの中に居たのは勿論であるが、産油量的にはマイナーな存在であり、もっと重大な使命を負わされていた。カフジの南三五〇kmにアラムコという世界最大の産油会社があり、これが本来の意味で大増産の担い手であったのだが、国境からあれだけ離れていても相当に浮足立っている彼等に操業を継続させる為には、「見る、国境の隣りでまだ操業している現場があるぞ」と発奮させる為のスケープゴートが必要だったのである。現地政府の命令に反して現場放棄する事は会社の消滅を意味するので、小生も立場上職場を死守せねばならず、苦悩する日々が続いた。

素が非常に大きい。原油生産基地のカフジには石油省始め中央官庁の支所があり、道場運営が定着するにつれ弟子の人脈が多様化して、役人のお歴々の子弟も稽古に加わっていたのである。彼等も又、立場上最後の最後迄持ち場を離れる事が許されない人々であり、息子がお世話になっておりますという関係以上に、緊迫した状況下では、いわば同病相哀れむという奇妙な友情が生まれた。

或る親父さん曰く、「最後の最後には軍のヘリが俺を迎えに来る事になっている。これでMr.岡本と一緒に逃げよう」。又、或る親父氏は二丁の拳銃を取り出して曰く「Mr.岡本も武装しておく必要がある。二丁あるから一丁持って居てくれ」。如何に緊急時とはいえ、外人の武装はきつい御法度であり、むしろそちらの方が危険なので有り難くお断りした。結局、稽古は開戦の直前まで続ける事になった。時の経過と共に恐怖が増大するにつれて当然の事であるが、住人の疎開が進み稽古に出て来る弟子は激減した。小生は弟子の去就を開戦時期を察知する為のセンサーにしていた。前述の逃げられない人々、内務省と石油

省のお歴々の子弟とカフジ高校の先生がそれである。彼等が道場に顔を見せている間は、まだまだ大丈夫な筈である。

一方、彼等も小生の事を一生懸命観察していたに違いない。「アメリカの最友好国である日本は何か太い情報パイプを持っているに違いない（とんでもない誤解であるが）。岡本がまだ柔道をやっている間は大丈夫だ」ところが国連の停戦期限である九一年一月十五日の前日が稽古

日に当り、道場へ行つて見ると先週までは出席していたセンサーと目している三人を含め弟子が一人も居ない。既にカフジの町並みはゴーストタウンの様に閑散としており、これは只事ではないと鳥肌が立つ思いがした。事務所の方はどうかと言うと、気の弱い連中はとつとく昔に消えてしまっていたが、まだ小生の内心必死の笑顔の演技にだまされて付いて来ていた部下の内、不急要員には一月十日に休暇の形で退避命令を出し、五名の腹心には残留を指名した。ところがその内三名は国連の停戦期限を過ぎた一月十六日に、震えながら退避の哀訴に来たのを職場離脱許可し、最後迄小生と行動を共にして、翌日未明に

イラク軍のロケット砲攻撃を浴びた部下は二名だけとなった。彼等が先に遠方に避難させた家族から、早く逃げて来いと矢のような催促を受けながらも最後迄小生に義理立てしてくれたのは、彼等がアラブ人の中で際だって優秀であった事もさる事ながら、柔道を媒介として築いた信頼関係が小生を置いて逃げる事を思い止まらせたからであると考え。彼等に退避指示を出して、部屋に緊急荷物を取りに戻り外に出た小生を待っていたのは、耳を聳するイラク軍のロケット砲の炸裂音と着弾の土砂煙であった。それから六時間に亘り、五、六百発の砲弾が我が現場を襲い、石油生産施設を破壊した。

イラク軍の攻撃を受けて十二日後に日本迄たどり着き、終戦を待つて一ヶ月半後に破壊された現場の復旧の為にカフジに戻り、その半年後に本社帰任した。帰任に先立ち現地政府の知り合いの高官達と現場のマネージメントには、最後迄小生に従ってくれたムゼイニー君とセイフ君の特進を申請して、両君に感謝を表した事は言う迄もない。

六 結 言

小生が湾岸戦争の様な人生のピンチに遭遇した時にこれに乗る越えるバイタリティとなったものは柔道マンとしての誇りと柔道を通じて培った現地人との信頼関係が大きな要素であった。又、良く小生に付いて来た弟子達に昇段昇級という形でけじめを着けてやるべく、前述の甲斐七段にはお世話になったが、彼は弟子を見ると共に小生自身を見て呉れていたらしい。彼には柔道文化の無風地帯において小生の行っていた柔道活動の継続性と組織性は非常に希な例であり、十分昇段に値すると評価して頂き、講道館国際部に推薦と報告をして頂いた。光栄な事に一回目の勤務時には四段を、二回目の勤務時には五段を頂戴する結果となった。所詮「鳥無き里の蝙蝠」であり、そんな大した柔道マンである筈が無いのは自分自身が一番良く解っているのだが、甲斐七段の思いやりは更に励めと言う叱咤であると解釈して、有り難く名譽を頂戴した。一生懸命努力をしていれば、誰かがチャント見ていてくれると云うのも柔道を通じて得た経験であり、柔道とは有り難いものであると、つくづく思う次第である。

平成十五年一月二十四日夕刻、日本生命秘書部から川瀬元社長ご逝去の一報があった。詳細など不明ながら、「本日午後四時過ぎ心臓停止で逝去された」との内容であった。ご行年は満八十六歳。

亡くなられる直前まで大阪淀屋橋の日本生命本店に精励され、担当の秘書から、とても元気にしておられると聞いていた矢先のことだった。

大正五年五月三日のお生まれ。日本生命では入社以来一貫して資産運用部門を歩まれた。現在の日本生命財務部門の基礎が、川瀬元社長によって形成されたことは、社内では周知の事実。小生が現在勤務している財務審査部門もその一つで、保守的な審査手法を伝統的に継承している。

故弘世現氏の後を継ぎ、昭和五十七年七月社長に就任された。日本生命では三十四年振りの社長交代であった。同世代の方々が既に各企業のトップに就いておられ、有価証券投資や融資などの業務を通して、それらの方々と交誼も深く、その人縁を通じたトップセールスにも積極的に尽力された。社長になっても常に謙虚な姿勢は変わら

ず、一方でマッキンゼー社の経営アドバイザーを真摯に受け止めて、肥大化して硬直的になりがちな組織を積極的に改組するなど、数々の経営改善も実行された。また大変な筆まめで、社内外を問わず、お礼、お見舞い、近況報告など、毎日十通を超える手紙を発信しておられた。当時彦根高商出身で丸紅の社長をしておられた池田松次郎氏が、社長就任早々に亡くなられ、担当秘書として小生も同氏の通

さんと対談の真つ最中であつた。このほか社長就任の挨拶をさせていただいた同窓の方々としては、オリンピック光学の北村社長（当時、彦根高商先輩）、近江絹糸の夏川社長（同、同級生）、宇野宗佑氏（衆議院議員、同後輩、後総理大臣）などがおられた。（※他にも多数おられたが、割愛させていただきます。）昭和五十七年七月、社長に就任されてから暫くして、当時陵水会理事長をしておられた高安

日本生命元社長

陵水会元理事長 故川瀬源太郎氏を偲んで

柴原良昭（大17回）

夜にご一緒させていただいた。社長就任間もなくの激務の中にあったが、通夜の開始から終了時まで残られ、故人を偲んでおられた。彦根高商で同級、席も前後の親友、河本氏（綾羽紡績、当時参議院議員）が国土長官に就任されたのもこの頃で、長官就任のお祝いかたがた、社長就任の挨拶で長官室に入っていたが、NHKテレビの収録（「新大臣に聞く」と重なり、同氏は人気キャスターの宮崎緑

氏が来社され、次期の理事長就任についてご要請があった。社長として多忙な時期にあり、生命保険協会の会長職も近々就任の予定があり、当初は固辞されていたが、最終的には母校発展のためとして了承された。（※小生も当時最年少ながら評議員に推薦され、今日に至っている。）

川瀬理事長就任直後の陵水会総会は、大学入学者からの陵水会入会金の経理処理や、海外からの受入れ留学生への奨学金財源の処理などで、議論百出。毎回三〜四時間を要する長時間総会となっていた。最終的には議論をまとめられ、今日みられる勘定処理体系の基礎を構築されるなど、理事長として多大な貢献をされた。また、三和銀行の川勝頭取（当時）にもご協力いただき、森文部大臣（当時、後



右から筆者・故川瀬理事長・同夫人

たり、ゴルフなどを趣味とされていた。ご上京の折は南青山のマンションを住まいとされ、休日などは朝早くから近くの永平寺別院で座禅をくまれ、精神修養に努めておられた。

昭和五十八年の十月末、仕事で会津にご一緒することがあった。この年は豪雪の年で、車で郡山から猪苗代湖の中山峠を越えると、突然の地吹雪に見舞われた。地元の運転手は平然としていたが、都会生活に馴れた小生には、秘書としての職責と併せ、極めて不安で、無事通過できることだけを祈っていた記憶がある

その日の夜、ある老舗旅館の離れに一泊したが、周りは全面雪景色。深々と冷え込むなか、心行くまで、会津の地酒を堪能させていただいた。秘書と二人だけの気楽さからか、日頃の激務からの解放感からか、川瀬当時の社長はいつになく酒を過ぎたが、翌朝は朝早くから起床され、当日の仕事の準備や予習などに専念されていた。

総理大臣―川勝氏と森氏は懇意）を訪問され、滋賀大学に情報科学部門を新設するよう陳情されたりなどとしてこられた。当時アサヒビールの社長をしておられた樋口廣太郎氏に、後任の理事長をお願いし、二期四年の任務を終えられた。ご自宅は兵庫県宝塚市で、奥様とご一緒に洋ランを栽培され

川瀬元社長の社長時代は、その安全性と保守性を一義とする経営方針が次第に社内深く浸透し、他の企業や金融機関のようにはバブルに踊らされて不良資

産を抱え、その後始末に終わるようなことは、比較的少なくして済んだ。他方、社長在任中の昭和六十二年には、「新契約高」、「保有契約高」、「収入保険料」（一般企業の売上高）、「総資産」（概ね資金量と同等）の四分野で、生命保険業界世界一位の座を確保するなど、後世に名を残される偉業も達成された。

I M F・世界銀行の総会や海外企業との提携などで、海外にもご夫妻と一緒させていた。緒したことが特に思い出される。戦争当時、舞鶴で乗り込むはずだった艦船が、肺浸潤で入院となり出航を見送られた後、台湾とフィリピンとの間のバシー海峡で、その船が米国潜水艦の魚雷を受けて沈没。直前まで親しくしていた戦友達、全員が死亡。海峡を臨む台湾最南端の地に立ち、いつまでも遙か海峡の方角に目を向けながら、涙ぐんでおられた姿が今でも忘れられない。

日本生命での社長・会長などの要職を離れ、晩年は淀屋橋の日本生命本店に週二、三回出勤するカタワラ、宝塚の自宅で趣味の洋ランを育て、時間ができると奥様と近隣を仲良く散歩す

る生活を楽しんでおられた。

平成十五年一月二十四日の日も、奥様と近隣を仲良く散歩されていたが、奥様が少し先を歩いていったとき突然意識を失われ、そのまま救急車で病院に移送された。既に心臓停止の状況にあり、最愛・最良の伴侶に看取られながら、あの世へ旅立たれた。

一月二十六日、近親者だけの葬儀が行われ、小生も末尾に参列させていただいた。ご出棺の直前、最後のお別れをした。それは安らかな顔だった。過酷な激務を全うされ、生涯の仕事をやり返げられた満足そうなお顔だった。海外や国内各地の支社にご一緒したこと、藤原弘達氏とのゴルフ談義やミッキー安川氏、中村通選手達とプレーされたサントリオープン・プロアマチャリティゴルフ会のこと、小田急電鉄細谷顧問（故人）との親交、水戸の偕楽園や伊豆高原と一緒に散策させていただいたことなど……、当時の光景や思い出が次々と走馬灯のように脳裏を駆け巡った。

自己に厳しく公正で、公私の区別が厳格。秘書として、同窓の後輩として、数多くの勉強と、人生経験を積ませていただいた

た。

改めて心からお礼申し上げます。そして、衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。 拝

（筆者は日本生命保険相互会社財務審査部勤務）

「高良会」が盛會裡に終る

元陵水会東京支部長の高安良雄氏（本5）を囲んで不定期に実施されてきた「高良会」が、平成十五年一月二十四日（金）午前十一時から、大老井伊直弼にゆかりのある、台東区柳橋の「亀清楼」において久々に開催された。

当日は、平成十五年の幹事会新年会も同時に開催されたこともあり、小池英夫支部長、宇治原嘉政副支部長以下二十五名が出席した。席上高安氏から、彦根高商入学当時の思い出、ポーター部での厳しい練習のなかにもあった楽しい思い出などが、ユ一モア一杯に披露され、高商卒業の会員もその話に加わるなどして、大いに盛り上がり、賑やかな懇談の場になった。

引き続き東京支部幹事会の打合せに入った。宇治原副支部長から自己紹介等交えた挨拶があり、直ちに懸案となっている平成十五年度支部総会の実施計画

の進行状況について、開催幹事の十五回卒生を代表して馬島惟安氏から説明が行われた。開催日は六月二十五日、会場は東織厚生年金会館、総会の進行内容はほぼ昨年並として決定をみたが、特別講演の講師について検討中とのことであり、母校の現役教授にお願いするとの方向付けがされた。



高良氏（右から二人目）他の皆さん

次に、小池支部長から母校創立八十周年記念学術後援基金の募金運動の展開と、支部としての協力体制の組み方についての説明と検討依頼がされた。

支部総会を前に準備会として、五月二十日（火）午後六時から東織厚生年金会館において支部幹事会が開催されることになっている。

母校の輝かしい歴史に

OBの結集力を示そう！

「滋賀大学経済学部創立八十周年記念学術後援基金」の募金計画が、陵水会名誉理事長樋口廣太郎、および同基金募金会会長岡田一両氏からの「趣意書」により、全陵水会員に呼びかけられていることは、既にご承知のとおりです。

当陵水会東京支部としても、会員各位の深いご

理解のもと、積極的に募金計画を推進していくこととしております。

同期会、部OB会などの機会に、本計画が多大な成果を持って達成されますよう、力強いご協力を切望いたします。

陵水会東京支部



第五十一回東京陵水ゴルフ会
平成十四年九月二十五日(火)
金乃台カントリーC(記録のみ)

記録 ネット(ハンディ)

優勝 守谷 貞夫(大12) 66(21)
二位 北沢勝太郎(短5) 70(10)
三位 中川 寿一(大10) 73(17)
四位 野口 泰良(大3) 74(34)
五位 天木 清次(大8) 74(10)
七位 井口 博民(本21) 75(20)
十位 竹内 鋭二(大4) 79(19)
十五位 原沢 伸治(大4) 80(27)
二十位 川村 和男(大6) 83(36)
BB 小池 英夫(大1) 92(30)
ベスグロ 北沢 80

ニヤピン 柴田(大2)・西沢
(本24)・箸方(大4)・大久保
(大6)・中川
大波 川村 小波 関本(本22)
水平 畠山(大10)
(参加者二十五名)

第五十二回東京陵水ゴルフ会
平成十五年十二月三日(火)
金乃台カントリーC

ゴルフ日和の師走

十一月下旬から、初冬には珍しく雨の多い不安定な天気が続くなか、この日ばかりは暖かく

無風の絶好のゴルフ日和。例年十二月の朝は霜でグリーンは真っ白、パットの難しい日が多いが、この日は緑一杯のコンディションのなかで、和気あいあいの忘年ゴルフ。初の組み合わせも多く、懇親の意義のあった一日だった。

好コンディションの中、万年青年の井口さんが平成九年十二月三日の川本杯取切り戦以来、丸四年ぶりの四アンダー優勝。ますますの体も口も元気に、一同勇気づけられる日だった。その他大学四回卒生が二位から五位と揃い踏み、話題の多い一日であった。

次回は四月九日(水)、陽春、多数の参加を期待。

記録 ネット(ハンディ)

優勝 井口 博民(本21) 67(20)
二位 箸方 海三(大4) 71(18)
三位 竹内 鋭二(大4) 72(19)
四位 原沢 伸治(大4) 72(27)
五位 北川 享(大4) 72(26)
七位 三宅 義男(大6) 72(26)
十位 天木 清次(大8) 74(10)
十五位 保正 保本(大24) 78(20)
二十位 碓井 富夫(大6) 80(9)
BB 守谷 貞夫(大12) 94(11)
ベスグロ 天木 84

ニヤピン 三井(大10)・箸方・竹内・碓井・大久保(大6)

大波 三井 小波 西坂(大9)
水平 大久保
(参加者二十八名) (箸方記)

第五十三回東京陵水ゴルフ会
平成十五年四月九日(水)
金乃台カントリーC

八十周年記念の

歌声に包まれて

春に三日の晴れ無しの言葉どおり、前日の春の嵐から一転雲一つ無い強風の好天下、少ないながら満開の桜に見守られて、三井さんら実力者が上位を占めた。

やや体調不良から欠席された小池支部長は、寄贈のワインと記念CDの、懐かしの歌声で盛り上げる懇親会に出席され、

「母校創立八十周年記念募金が、この時期企業寄附金の苦戦が予想され、それだけに個人寄附金に頼り。同期会、クラブ同好会の席で、このCD、歌集をリリースして協力をお願いして！」と熱弁。あと代わる代わる賛同、推進のスピーチに一同了承。次回は六月十一日(水)開催。多数の参加を期待。

記録 ネット(ハンディ)

優勝 三井 照次(大10) 68(9)
二位 天木 清(大8) 70(10)
三位 三宅 義男(大6) 71(26)

四位 宇治原嘉政(大7) 72(24)
五位 箸方 海三(大4) 74(14)
七位 池田 辰彦(大8) 74(18)
十位 楠田 迪彦(本24) 76(22)
十五位 畠山 義生(大10) 78(7)
二十位 西沢 正本(大24) 81(14)
BB 北川 享(大4) 92(26)
ベスグロ 三井 77
ニヤピン 柴田(大2)・浦谷
(大7)・碓井(大6)・川本
(大1)・池田・箸方・畠山
松浦(大8)
大波 野口(大3) 小波 畠山
水平 碓井
(参加者三十名) (箸方記)

東京陵水会囲碁会便り

東京陵水会囲碁会は、井上明郎氏(大5)幹事で棋楽会を、月一回八重洲の日本棋院で開催し、棋力向上に努めながら親睦を深めております。

当会には大学5回卒(昭和三十三年卒)の方が多く、その同期会で大阪支部長の曾々木勉氏(大5)との話し合いで東京、大阪の合同囲碁会をやつたらということになり、湯河原の杉の宿(娯楽民宿)で、四月十七日、十八日に東京、大阪の合同囲碁会を開催する事になりました。その上に棋楽会で、畠山義生氏

(大10)が大学になってから囲碁部を始めた仲間の名古屋の篠田豊氏(大11)を誘って下さつて、陵水会の全国囲碁大会となったようです。大阪の方では松浦義敬氏(大7)、東京では天田志郎氏(大5)、井上明郎(大5)にお世話頂きました。

二十七名のご参加でしたが、年齢のわりには皆さん若々しく、五局の本戦が終わった後でも夜中の二時頃まで対局が続いておりました。自分たちの部屋に行つて朝までなさんた方もおられたようでした。

大変和やかで清々しい素晴らしい集まりだったと思っております。入賞者は次の通りです。

Aグループ

優勝 畠山義生 四段(大10)
準優勝 神谷守利 七段(大11)
三位 中村祐三 五段(大9)
四位 木船一男 五段(大12)
五位 鎌田秀哉 七段(大5)
七位 篠田豊氏 九段(大11)

Bグループ

優勝 後藤 靖 四段(大5)
準優勝 細井専司 四段(大9)
三位 青島 弘 四段(大5)
四位 奥地憲二 初段(大3)
五位 浅野一通 四段(大7)
七位 吉原悟一 四段(大9)
(吉原記)

彦根コンフィデンシャル

—— 滋大陵水新聞会

○平成十五年度入学者選抜試験の状況

況は次の通り。

民間企業三百十六社四百四名

平成十五年度の母校入学者の選抜試験の結果は、国立大学行（六名）、自営八名（一名）、進学二十六名（十一名）、その他見れたか探った。前年に比べて志願者が二十一人減り、倍率も○・一パーセント下がったが、

民間企業内訳は建設八（二）

状態には変化がなかった。内訳は次の通り。ファイナンス、会計情報の人気が上がり、時代の指向を反映している。（左表）

○平成十四年度卒業生就職の状況。括弧は内女子数

平成十四年度卒業生就職の内定先の、十五年三月末現在の状況。

学 科	志願者	倍 率	前年倍率
経 済	238	3.4	3.1
ファイナンス	160	7.0	3.5
企業経営	104	3.2	5.9
会計情報	106	4.6	3.8
情報管理	126	5.3	5.8
社会システム	154	5.9	6.5
前期計	888	4.4	4.5
経 済	790	9.4	8.8
ファイナンス	331	11.0	7.5
企業経営	306	8.3	13.7
会計情報	399	16.0	9.3
情報管理	274	9.4	7.0
社会システム	371	10.3	16.3
後期計	2,471	10.3	10.4
合 計	3,359	7.6	7.7

（二十四・五）電力○・七（○・五）運輸通信十三・四（三・六）卸売小売り十五・三（十三・六）金融保険三十三・二（二十九・五）不動産一・五（一・七）サービス十三・一（二十二・五）となる。

目立って変化を見せたのは、運輸通信業、特に通信（ＩＴ）関係への進出である。サービス業が一転して少なくなった。製造業も不況の拡大により採用企業が少なくなった事が考えられる。金融不況と言われるなか、伝統的にこの面の強さは相変わらずと見える。就職人数の多い企業は京都銀行十五、京都中央信用金庫八、滋賀銀行六の順である。

お詫びと訂正

本紙八十四号（平成十五年一月一日付）、十四ページ「彦根経専二十四期同窓会」記事、「当日予定の林君（多治見中学出身）の計報に接してもおり」の箇所を、「当日参加予定の林君（多治見中学出身）の計報に接し」に訂正します。記事執筆者の高木氏にはご迷惑をお懸けしお詫び申し上げます。

編集室 所感

「八十周年」という記念の年にあたり、陵水会本部の動きにも大いなる関心を寄せることはもとよりですが、東京支部の本年度総会へ向けての幹事（大15）諸氏の熱意を会員各位に受け止めていただき、（総会へ）お誘

東京支部ホームページ

（HP）の活用を

当支部ホームページは、掲載記事項目を、お知らせ、総会、各回・部幹事・会合、ゴルフ同好会、囲碁同好会、グルメ同好会、会報「東京陵水」、会員の近況、関係ホームページ等に分けて、利用を容易にするようにしています。

「お知らせ」の中では、十五

い合わせのうえおでかけくださいの呼び掛けにぜひ応えたいものです。

本紙では、支部会員の自慢話、作詞・作歌の発表、お宝？ 拝見等々による会員投稿欄を充実しようと企画しています。原稿字数等の制限は特にありません。奮っての御投稿をお待ちしています。原稿宛先は、左記の「原稿・情報ご送付先」です。

「会報」原稿・情報ご送付先

林 史欣（大8回）

〒164-0014

中野区南台二一五一〇

（TEL・FAXとも）

〇三―三三八―四四三二

※編集室のメールアドレスを

chikayoshihayashi@nifty.com

としましたのでご利用下さい。

（次号分メ切日 十月末日）

発行所

〒231-0801

横浜市中区新山下3-9-3

陵水会東京支部 支部長 小池英夫

電話045(622) 2686

印刷所

〒110-0015

東京都台東区東上野1-28-3

船舶印刷株

電話03(3831) 4181

東京支部HPは<http://www2.ocn.ne.jp/~ryousuit>。